

岐阜の昭和史として 大日開拓団が記事となる！

～岐阜新聞の文化・歴史欄にて取り上げられる。～

2014年（平成26年）7月27日日曜日岐阜新聞 朝刊



この新聞記事を見た鈴木吉郎会員から、次のようなお手紙をいただいたので紹介します。

ひるがのに“理想郷”を築く—福手豊丸さんの満百歳の誕生日に寄せて—

7月27日刊行の岐阜新聞、表題のような“岐阜県の昭和史”という特集記事を読みました。今月で満百歳を迎えた耳の遠い福手豊丸さんから、二日がかりの熱心な取材で得られたひるがの開拓の原点を探求した、ひるがのに住む者にとって大変興味深い記事でした。

昭和21年11月 大日開拓団結団式で団長山下勘治さんの「いざ友よ、共に築かむひるがのに、乳と蜜との流るる里を」「このひるがのから一人も飢える者を出さない、そのかわり一人の千万長者もつくってはならん。」という大号令のもと、現場の指導者となった福手さんは「弱肉強食ではなく、互いの心が結ばれた新しい村をつくるんだ」という決意のもと、「ナニクソ(堅忍不拔)、オカゲサマ(報恩謝徳)」の凌霜塾魂で、今日まで70余年の歳月を“理想郷”づくりに捧げてきました。

福手さんの奥さんの、“体の良い乞食と言われ 我が開拓者 狐棲む野を開墾す”という短歌に良く表されているように、古来から人の住めない不毛の地だった湿原を、近隣の部落の人達から白い目で見られながらの開拓事業の苦労は、想像を絶するものがあったことと思います。

また、団員の家族の生活を一身に背負っての行政や近隣住民との折衝で、ムラ社会でのよそ者の悲哀を痛切に味わいながらの精神的な労苦に耐えられたのは、凌霜魂に支えられた強靱な精神があったからでしょう。

そんな福手さんが今思うことは、「開拓に反対した村民も、入植後は自分たちを差別しなかった。今のひるがのは開拓団だけが築いたわけでない。その後定住してくれた人も新しい考え方をもち込んでくれた。古い人も新しい人も、持てる者も持たざる者も、みな友として共に新しい村を築けた。緑豊かな乳と蜜の流るる里は、友愛の心が花開かせたかもしれない。」と語っています。素晴らしい言葉です。

100年間生きてきて、“恩讐の彼方”に達した人間だけが言える言葉ではないでしょうか。

私は都会からこの地に移住してきて20年になるよそ者ですが、今やレジェンドとなった語り部の福手さんをおして、フロンティア・スピリッツ(開拓者魂)というものの凄さが、身近に伝わってくる感慨深い記事でした。